

『青鞜』

一九二二年九月創刊。

「女流文学の発達を計り、各自天賦の特性を發揮せしめ、他日女流の天才を生まむ」

ことを目的に創刊される。

主宰したのは平塚らいてう。

その創刊の辞「元始女性は太陽であった」は、

封建的家制度下に呻吟する女性たちの心をゆさぶり、

今もなお古びない。

やがて「新しい女」バッシングが起きるが、逆に「私は新しい女である」と女性

解放の旗印を掲げ、文学雑誌の枠を越えて「貞操」「墮胎」「公娼制度」「姦

通」など女性の性をめぐる問題を提起した。

編集が伊藤野枝の手に移ったのち六巻二号で終刊。五二冊を出版した。

●関連図書のご案内

岩田ななつ

文学としての『青鞜』

『青鞜』の本質は文学にある―女性による女性のための文学雑誌として登場した『青鞜』。

女性解放思想雑誌として展開した後も原動力となったのは、小説で自己表現したいという

女性たちの欲求であった。『青鞜』の文学を読み解き、文学史上で『青鞜』が果たした役割を

再評価する意欲作！

四六判 上製 280ページ／定価●本体1,800円＋税 ISBN4-8350-1261-5

渡邊澄子

青鞜の女・尾竹紅吉伝

青鞜社、在社期間わずか九カ月。そのとき紅吉、十八歳。「新しい女」として彗星のように現

れ、『青鞜』を『青鞜』たらしめた天性のフェミニストは、自由恋愛と性差別の桎梏に苦悩もし

た。まさに女の近代を体現した存在だった。尾竹紅吉＝富本枝の初めての本格的評伝！

四六判 上製 380ページ／定価●本体3,500円＋税 ISBN4-8350-3874-6

●表示価格はすべて税別。

不二出版

T11300023

東京都文京区向丘1-22-12

電話03・3812・4433

ファクシミリ03・3812・4464

振替00160・2・94084

青鞜文学集

不二出版

創刊から一世紀近くを経て、フェミニズムの
金字塔として色あせない『青鞜』(一九二二年九月〜一九二六年二月刊)。
その出発点であった「女性と文学」にこだわって、
全五二冊の中から小説を中心に珠玉の二〇点を選び収録。

岩田ななつ 編・解題

定価●本体 二,〇〇〇円＋税

A5判・並製・カバー装・約二四〇ページ／二〇〇四年九月刊

◎本書「元始女性は太陽であつた」(平塚らいてう)より

*旧漢字は新漢字に改め、旧仮名づかいはそのままにして組み直した。

元始、女性は実に太陽であつた。真正の人であつた。
今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。
偕てこゝに「青鞥」は初声を上げた。

現代の日本の女性の頭脳と手によつて始めて出来た「青鞥」は初声を上げた。
女性のなすことは今は只嘲りの笑を招くばかりである。

私はよく知つてゐる、嘲りの笑の下に隠れたる或ものを。

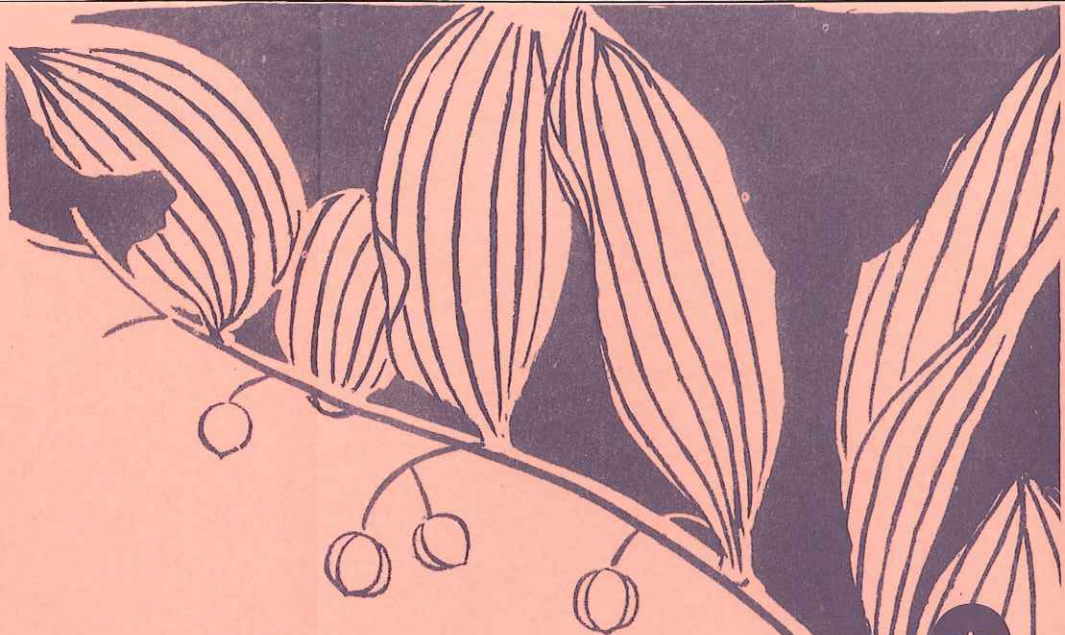
そして私は少しも恐れない。

併し、どうしやう女性みづからがみづからの上に更に新にした羞恥と汚辱の惨まじさを。

女性とは斯くも嘔吐に価するものだらうか、

否々、真正の人とは――

私共は今日の女性として出来る丈のことをした。心の総てを尽してそして産み上げた子供がこの「青鞥」なのだ。よ



青鞥文学集

そごろごと 与謝野晶子

生血 田村とし子

元始女性は太陽であつた らいてう

枯草 岩野清

母の死 岩田由美

お葉 物集和

習作の一 杉本正生

乙弥と兄 林千歳

手紙 荒木郁

泥水 小笠原貞

風吹く日 加藤緑

新らしき生命 野上弥生子

夜汽車 斎賀琴

女房始め 上野葉

旬日の友 菅原初

石のをんな 奈々子(長谷川時雨)

水神の祟 岡田ゆき

獄中の女より男に 原田皐月

白刃の跡 佐藤欽子

小さき者 吉屋信子

＊
解題 岩田ななつ



●弊社は注文制です。お近くの書店へご注文下さい。

注文カード

帖合・貴店名

注文数

冊

不二出版

岩田ななつ 編・解題

青鞥文学集

定価◎本体二、〇〇〇円＋税

ISBN4-8350-3124-5 C3093 ¥2000E

お名前

お電話番号

注文 年 月 日